



ハレム テンプレション

HAREM TEMPTATION

小説 竹内けん

挿絵 夫神ゆうき

立ち読み版



登場人物紹介

Characters

エリーゼ

忍者集団・夜鳥衆の一人。明るく朗らかにエッチなことを教えてくれる綺麗なお姉さん。



シーマ

夜鳥衆のナンバー2で、頭領のよき補佐役。武器として鋼糸を操るクールビューティー。

ハヤテ

忍者の卵。頭領に犬のように忠実に仕える。命令を受け「竿師」になる修行をすることに。



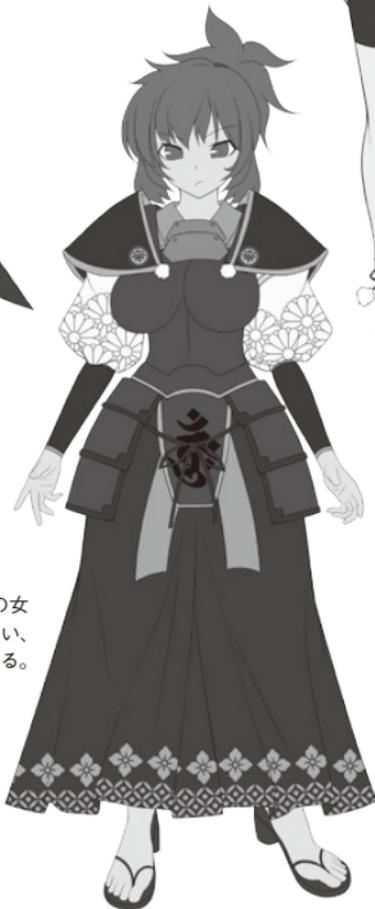
ダルシエナ

ハヤテの幼なじみで喧嘩相手。
シーマに憧れており、オネエ
サマとして慕っている。



レイヴン

夜烏衆の棟梁。頭巾を被り、
金の仮面を付けている。謎
に満ちた人物。



ルクレシア

ラーズングランド地方の女
領主。薙刀を自在に振るい、
一騎当千の力を見せつける。

第一章	闇夜に飛ぶ烏たち	009
第二章	エロエロお姉さんとのエッチな修行	048
第三章	乱交修行	086
第四章	最終試験	128
第五章	命がけの誘惑	164
第六章	ミッションコンプリート	207

それにベッドから上半身だけ起こしたハヤテのちょうど目線の高さに、傍らの椅子に座ったレイヴウンの乳房がきていた。

(いままで気づかなかったけど、お頭つて巨乳なんだ)

じろじろ見てはいけないと思って視線を外すのだが、ちょうど目の前にあるのだから見ないわけにもいかない。

いままでのハヤテの人生では、こんな身近にこんな巨乳な女性は身近にいなかった。

シーマはスレンダー美人でとっても格好よかったが、乳房の大きさでいえば、残念なお姉様である。

ダルシエナに至っては、問題外のツルペタ娘だ。

そういう意味で、巨乳女に免疫がなかったハヤテが、視線をどこに持っていいかわからずおろおろしていると、レイヴウンは仮面の下の口元を引き締めた。

「おまえは親父のことを気にしているのか？」

「……」

「コガラシはよい忍びだった」

ハヤテの父親コガラシは、かつて中忍として一組を任される使い手だった。

しかし、伝説の大魔術師ヴラットヴェインの弟子グリンダの依頼で、女剣聖として名高いイレエネを襲撃したとき、部隊もろともに殺されてしまった。

二十人からの人が、皆殺しにされたのだ。その家族は当然、指揮した者を恨む。

ハヤテは、無能者の息子として、子供の頃から周囲に白い目で見られてきた。その汚名をすすぐには、一刻も早く成人して、忍びとして活躍し、一族の者に認められるしかない。

その一心で今日まで頑張ってきた、という側面がある。

「相手が悪かったのだ。そのことはみな知っている。そう父親を嫌うな」

「は、はい……」

お頭の言葉だから領いただけで、ハヤテがまったく父親を許していないことは一目瞭然であった。

「ふっ」

ふいにレイヴウンの赤い唇が、口角をニツと上げた。

いまとつても悪いこと思いつきました。といった表情だ。

「なんだ、おまえはわたしの胸が気になるのか？」

「い、いえ……そんな……」

自分の視線が胸に行っていたことがバレたのを知ったハヤテは、顔を真っ赤にして俯く。

その右の耳元に吐息がかかるようにしてレイヴウンは妖しく囁く。

「なるほど、おまえはわたしに欲情しているわけか？」

「そ、そんな恐れ多い」

あたふたするハヤテを間近に見て、レイヴウンは意外な行動に出た。

「うふふ、では、今回のおまえの活躍を祝して、わたしから特別ご褒美をやるう」

なんと冷酷非情な女殺し屋のトップのような女が、ハヤテの頭を両手で持ったかと思うと、胸の内に抱き寄せたのだ。

「うぷっ」

ハヤテの視界が黒い布で支配された。顔にはこの世のものとは思えぬ弾力が襲いかかる。
（おっぱい！ おっぱい？ おっぱいー!!）

頭の中がおっぱいという文字で埋め尽くされそうだ。

女の甘い汗の匂いが鼻腔をくすぐり、少年を得も言われぬ桃源郷に誘う。

「どうだ、これはわたしからおまえに対するお礼のつもりだが、お礼になっているか？」

「あ、はい。凄いです。お頭のおっぱい、大きくて、柔らかくて、温かくて、それどころか、かく気持ちいいです」

いくら一流の忍びになることを夢見る硬派な少年とはいえ、所詮は思春期の男の子。綺麗なお姉さんの乳房に顔を埋めて理性がぶっ飛んでしまうのは致し方がないところだろう。

相手が百歳を超える怪物だということも忘れて、歓喜してしまつた。

「そうか。そう喜んでももらえるとわたしも嬉しい。好きなだけそうしている」

「はい、ありがとうございます」

年上のお姉様にとつて、ハヤテのようなあからさまな童貞少年はつかいかいたくなるのかもしれない。

レイヴンはらしくない嬉しそうな声を出している。

（あ、おっぱい。お頭のおっぱいふわふわだ。ダ、ダメ、気持ちよすぎて、ああ、お漏らししそう……）

ハヤテは最近、精通を迎えて、射精の気持ちよさを知ってしまったばかりの少年だった。ちなみに、オナペットは忍び装束のシーマである。しかし、現在はそのオカズにしているお姉さんを遥かに上回る巨乳に顔を埋めているのだ。

その至上の幸福に浸っていると、触りもしない逸物が脈打って、射精しそうになっていた。

ここで射精してしまうのは最悪の展開であろう。気分を害した頭領に、殺されてしまうかもしれない。

ハヤテは神の如く敬愛し、悪魔の如く恐れる頭領の乳房に顔を埋めながら、最悪の事態だけは避けようと、必死に膝を閉じて耐えている。

そんな嬉しい苦難と戦っていると、新たな人影が、室内に入ってきた。

※

「ハヤテ、生きているう、死んでいたら返事しなあ。見舞いにきてやったわよ。どんくさ……いっ!？」

さりげなく無茶なことを言いながら陽気に入ってきたのは、白金色の髪をツインテールにしたダルシェナである。

「お頭っ!!」

凝然と目を剥き立ちつくすダルシエナの後ろから入室してきた褐色肌銀髪美人シーマは、室内の光景に苦笑する。

「あらあら、お頭つてば浮いた噂を聞かないと思つたら、ひそかに美少年趣味だったんですね」

「ち、違う。こいつが調略に使えるかと思つて試してただけだ」

珍しく動揺した声を上げたレイヴンは、慌ててハヤテを離しながら言い訳がましく答える。

「ハ、ハヤテを調略に使う?」

意外なことを言われ、動揺から立ち直つていないダルシエナはまたも目を白黒させた。

その横で腕組みをして右手の指で顎を掴みながら、シーマは考え考え答える。

「色仕掛けですか」

「ああ、ルクレシアは未亡人だ。部屋にはあんなものを隠していたくらいの欲求不満だ。

それに明らかにこいつを殺すのを躊躇つた。つまりシヨタコンというわけだ」

「なるほど、一騎当千の女武者も、下半身を責めると案外脆いかもしれませぬね」

納得したと言いたげに頷いたシーマだが、次いで肩を竦めた。

「卒師を育てようとは、さすがはお頭、えぐいことを考えますね」

「我々は忍びだ。敵の弱点がわかればそれを徹底的に責める」

黄金の仮面を着けた怪人は、すべては計算通りと言いたげにクールに應える。しかし、シーマは首を横に振るった。

「でも、そいつにはそんな器用な真似はできないと思いますよ」

「なぜだ。なかなかの美少年ではないか？」

「まあ、いま証拠をお見せしますよ」

会心の策を腹心の部下にあつさり否定されて、面白くなさそうな声を出すレイヴウンを横目に、シーマはベッドに乗った。

「ダルシエナ。おまえはハヤテの足を押さえている」

「はい。シーマお姉様♪」

シーマには絶対服従のダルシエナは、指示を与えられて嬉しいと言いたげに嬉々としてベッドに乗ると、ハヤテの足を押さえた。

「お頭様、わたしもこいつにそんな特別な任務無理だと思えますよ。なんならわたくしがその竿師とやらを引き受けますが？」

どうやら、竿師というものの意味が全然わかっていないらしいダルシエナの言動に、シーマは苦笑するとハヤテのズボンを脱がせにかかった。

「な、何を!? シーマ姐さん!？」

「こら暴れるな! ってシーマお姉様?」

ハヤテを押さえつけるダルシエナが驚く前で、シーマはズボンと下着を脱がせてしまっ

た。

びよんつとバネを利かせて、逸物が跳ね上がる。

「どれどれ」

「あ、やめて……見ないで……」

三人の女に囲まれて、ハヤテは輪姦される乙女の如く、世にも情けない悲鳴を上げてしまった。

逸物を覗き込んだシーマは、残念そうに溜息をつく。

「やっぱ、包茎だわ」

「しょぼっ」

敬愛するお姉様の背後から恐る恐る覗き込んでいたダルシエナが、見るに堪えないといった様子で吐き捨てた。

しかしながら、ダルシエナも年頃の女の子。同年代の異性の生殖器に興味津々のようである。

ためつすがめつ逸物を見て観察した。

「なんか芋虫みたい。これがあんたのおちんちんってわけ？ マジでキモいんだけど。それにびしょびしょ、何こいつ、例の城主に一発入れられて漏らしたの？」

「そう言ってるな。これは濡れているだけだ。女と同じだよ」

初めて男性器を見て動揺したのだろう。言いたい放題の小娘を窘めたたしなシーマが、上司に

進言する。

「お頭、こんな粗チンじゃ。未亡人を籠絡するどころか、散々に搾り取られて、ゴミみたいに捨てられるのがオチですよ」

「何か問題があるのか？」

仮面の女は、努めて平静な声で質問した。

「まあ、見ていてください」

シーマは右手を伸ばすと、逸物を掴んだ。そして、包皮を剥きにかかった。

「ひい、や、やめて、ください。イ、痛い、痛い、痛いっ！」

忍びとして訓練されてきた少年である。多少の痛みには耐性があった。しかし、包皮を初剥きされる痛みには耐えられず、泣き喚いてしまった。

しかし、シーマは容赦なくすべて剥き下ろした。

「あ——ッ！」

亀頭を包む薄皮が剥かれて、白い網の目状の物体が大量に付着した赤い実があらわたなつた。

空気に触れているだけでも痛い粘膜を晒し、どうすることもできない捕らわれの少年は、無様に腰を突き上げることしかできなかった。

そこを覗き込んだダルシエナが叫ぶ。

「うわ、汚なっ！ 何これ垢？」

「恥垢だ。童貞ちゃんぼなんてこんなもんだ」

無邪気に少年の心をえぐりまくっている少女を窘めながら、シーマは右手で肉棒を掴んだ。

「シーマお姉様、何をやっているんですか？」

「ここまで勃起したちんちんを見たら、射精させてやるのが女の情けというものだ」

驚愕するダルシエナを無視して、シーマはシコシコと逸物を扱しき上げた。

「あ、そんな、いや……やめてえええええ」

もともとレイヴウンの胸に顔を埋めただけで射精しそうになっていた逸物である。その状態で初めて異性に触れられた。

それだけでも天にも昇らんばかりに興奮しているのに、皮を剥かれて扱しかれているのだ。これでは性に目覚めたばかりの童貞少年が耐えられる道理がなかった。

(痛い。痛いけど気持ちいい。おちんちんが溶ける。感覚がなくなる)

激しい痛みと、それを上回る快感に板挟みにされたハヤテは何も考えられなくなり、ただただ惚けてしまった。

「わあ、何こいつ。だらしのない顔。男っておちんちん扱しかれるとこんな顔になっちゃうの？」

「まあ、男の急所だからな。おまえも女忍びなんだから、おちんちんの扱しぐらい覚えておけ。……ほら、そろそろ出すぞ」

シーマの手の中で少年の逸物はビクビク震えた。いや、全身が激しく震える。



「おっぱい触るだけで満足なの？ 舌で味わいたくはない？」

「な、舐めていいんですか？」

興奮したハヤテは喘ぎながら質問を返すと、エリーゼはにっこりと微笑む。

「当然よ。女を官能の炎であぶり殺すためには手段を選ばない。それが竿師というものよ」
「しゃぶりたいです。エリーゼさんのおっぱいっ!!」

もはやハヤテは取り繕うことはできなかつた。襲いかからんばかりに力いっぱい主張する。

「そっか、なら好きなだけしゃぶらせてあげるよ」

ザバツ!

満足げな笑みを浮かべたエリーゼは湯船から身を起こし中腰になった。そして、風呂桶の左右に手をかけながら、ハヤテの鼻先に乳首を突き出す。

乳牛のような大きな乳房なのに、乳首は綺麗なピンク色の花の蕾のようだ。

ハヤテはそれぞれの手に持った両の乳房を牛乳でも搾り出すかのように握ると、その頂^{いただき}を飾る乳首にしゃぶりついた。

完全にヤニ下がった表情で、おっぱいにむしゃぶりつく。

「あはっ、ほんとハヤテくんっておっぱい好きよね」

熱い吐息を吐きながらエリーゼは両手でハヤテの頭を愛しげに抱く。

ハヤテの口内では、乳首が堅くなつていくのがわかる。

(あ、コリコリだ。コリコリになっていく)

こんな乳牛のような大きな乳房をしているのに、母乳が出ないのは不思議だった。絶対に母乳が出るはずだ。そんな根拠のない思い込みに囚われて、ハヤテは夢中になって吸い上げる。

「あ、そんな強く吸われたら、ああ……気持ちいい、もつといっぱい、左右を交互に吸って、あーん、おっぱいから痺れる♪ 痺れちゃうう、いいの♪ 凄くいいのお♪」

少年の頭を抱きながらエリーゼは悩乱の声を上げる。ハヤテは夢中になって吸いまくった。

「ああ、もうダメ、わたしもう……はあー♪ おっぱいだけで、おっぱいだけでいつちゃう♪ イっちゃうの♪ イつくう~~~~♪」

真夏の野外の風呂。山々に木霊こだますることも構わず、情けない声を張り上げたエリーゼはヘナヘナと湯船に崩れ落ちた。

湯に浸かつては息ができませんので、やむなくハヤテは乳首から口を離した。

「もう、ハヤテくんったら激しすぎ♪」

頬を染めたエリーゼは、この悪戯小僧めと言いたげに、ハヤテの頬を指で突いた。

「……すいません」

自分でも必死すぎたと反省したハヤテは、真っ赤な顔を半分湯船に沈める。

そんなハヤテをエリーゼは慰めた。

「次はわたしがやってあげる。ハヤテくんそろそろ限界でしょ。ほら立って」

ハヤテに立ち上がるように促したエリーゼは、逆に湯船に肩まで沈んだ。

エリーゼの鼻先で、ピョンツと水面から逸物が跳ね上がる。

「うふふ、可愛い♪」

鼻先に突き出された逸物を、エリーゼは両手で掴んだ。

「ああ……」

「まず包茎から直そうか？」

「……えっ！ あ、やめて！」

昨晚の激痛地獄を思い出したハヤテは目を剥いたが、もはや遅かった。

エリーゼは情け容赦なく包皮を剥きにかかる。

「あぐっ」

無様に悲鳴を上げることが、男としての矜持が許さず、ハヤテは必死に左手の人差し指

の背を嚙んで耐えた。

その間に、包皮はめいっばいズル剥けにされてしまう。

「うふふ、可愛い♪」

白い恥垢がたっぷりと付着している亀頭部を鼻先に見つめたエリーゼは、次いで上目遣

いになって、涙目になっているハヤテの顔を見た。

「わたしが、洗ってあげるね♪」

「はう……」

ハヤテには拒否権などなかった。

ただただ恥辱と激痛に耐えている間に、エリーゼは亀頭部にお湯をかけて指先で丁寧に洗い清めていく。

空気が触れるだけでも痛い敏感な粘膜に、女性の繊手とはいえ異物が触れたのだ。

ハヤテは目が回るほどの激痛に襲われたが、同時にかつて体験したことのない甘美な快感に襲われた。

「さて、綺麗になった♪」

真っ赤に腫れ上がった亀頭部を愛しげに見つめたエリーゼは、満足げに頷く。

「ハヤテくんのおちんちんって美味しそうね♪」

チロリとピンクの舌で舌舐めずりをしたエリーゼは、それを伸ばした。そして、亀頭部の先端にある尿道口をペロリと舐め上げる。

「はう！」

一舐めではない。ペロリ、ペロリ、ペロリ、と猫がミルクを舐めるような熱心さで亀頭部の隅々を舐め回してきた。

剥き出しの亀頭部からは、のたうち回りたくなるほどのジンジンとした痛みが襲ってきているのに、そこに女性の唾液を塗りたいくらいられることによって、得も言われぬ法悦に変わって少年の全身を駆け回る。

「ほう、あう……エリーゼさん、そんなにされたら、僕、もう……」

「これは修行なんだから、すぐに出してはダメよ。死ぬ気で我慢しなさい」

世にも情けない悲鳴を上げる少年を上目遣いにチラリと見たエリーゼは、ぎゅつと肉幹を締めながら厳しく命じた。

「あ、はい！」

修行という言葉がハヤテには効いた。

奥歯を噛み締め、丹田に力を込めて必死に射精を我慢する。

「うふふ、そうそう竿師というのはそう簡単に出してはダメよ。女を何度も何度もイかさなくちゃいけないんだからね。女が泣きながら、もう許してつて叫んでも許さず、イかせまくる。そして、最後に強烈な一撃を叩き込んで、身も心も墮とす」

蘊蓄うんちくを垂れながら嬉しそうに龟头部を舐め回したエリーゼだったが、それだけでは飽き足らなくなったらしい。止め処なく先走りの液を垂れ流す赤いお肉を、パツクリと口に啜くえてしまった。

「はわわ……」

龟头部が生暖かく湿度の高い空間に閉じ込められた。

その感覚以上に、綺麗なお姉さんが、自分の排泄器官である汚い逸物を、口に啜くえている、という光景が衝撃的だった。

睾丸から溢れ出した熱い液体が、肉棒を駆け上がっていく。まさにその瞬間、エリーゼ

は逸物から口を離し、黒い瞳で見上げて、少年を牽制する。

「これは修行なんだからね。我慢よ、我慢。男の子は我慢が肝心なんだから♪」

「は、はい……」

我に返ったハヤテは必死に尿道を締めて、射精を我慢する。

そんな断末魔の痙攣に。プルプル震える逸物を、エリーゼは再び口に含んだ。

今度は唾えただけではない。生暖かい口内では小蛇のような舌が亀頭部に絡みついている。舌の側面のザラザラしたところが擦りつけられた。

（ひい、な、なんだこれ。気持ちよすぎる……、これで我慢しろだなんて）

あまりにも酷な修行にハヤテは泣きたくなつた。

亀頭といわず、逸物といわず、全身が気持ちいい。

（で、で、で、でる、でる、でる……うう、でもこれは修行、修行、修行なんだから、我慢、我慢、我慢、我慢する僕、でえ、でも、気持ちいいいい）

襲いくる快感という名の強敵に、一流の忍びになることを夢見る少年は、意地と根性と、ありつたけの気合いで耐えた。

そして、その全身全霊をかけた戦いにどうやら勝利することができたらしい。

肉棒だけでなく全身をビクビク震わせながら頑張る少年の姿に微笑したエリーゼは、一
旦肉棒から口を離した。

「うふふ、よく頑張ったわね。それじゃ、ここまで我慢できたハヤテくんにご褒美。ほら、

ハヤテくんの大好きなおっぱいで挟んであげる」

エリーゼは少しだけ上体を上げると、自ら乳房を両脇から持った。そして、その狭間に逸物を挟んだ。

「あ、ああ……」

巨大な乳房に逸物が埋もれている。夢にも見たことがなかったその淫らな光景にハヤテは目を剥いた。

（お、おっぱいって、こういうふうにも使えるんだ……知らなかった。エロい。エロすぎるよ、このお姉さん）

純情少年がカルチャーショックを受けていると、淫乱お姉さんはさらに乳房をモミモミと左右から押しつけてきた。

「ハヤテくんったら、ほんととおっぱい好きね」

「はわあああ……す、すいません……」

「謝ることないわよ。わたしはおっぱい気に入ってもらえて嬉しいんだからあ」

悪戯っぽい笑みを浮かべたエリーゼは、逸物を挟んだ双乳を大胆に上下させ始めた。しかも、上目遣いでじっとハヤテの目を見ながら、舌を伸ばし、狭間から出た亀頭部の裏側の筋を舌先で左右に弾いている。

「ひい、あ、す、凄い……」

「さらにサーピス」

エリーゼはトドメとばかりに尿道口を口唇に含むと、チューチューとストローでも吸い上げるように吸引してきたからたまらない。

「も、もう……もう、もう、もう、ダメだあああああ!!!」

意地っ張りな少年も、刀折れ矢尽きて敗北した。

断末魔の悲鳴とともに逸物を激しく脈動させた。そのあまりの活きのよさに驚いたエリーゼは、龟头部を口から離してしまう。

ドビユ、ドビユ、ドビユッ、ドビユッ!

双乳の谷間を駆け抜けて、肉棒の先端からは白い液体が活火山のように噴火する。綺麗なお姉さんたるエリーゼの顔がみるみるうちに、白く染まっていく。

「あはっ♪ すごい。こないっぱい出すなんて、ハヤテくんったらエッチ♪」
「あはっ♪ すごい。こないっぱい出すなんて、ハヤテくんったらエッチ♪」

「あ、エリーゼさん、何を……?」

驚くハヤテの眼下でエリーゼは、暴れる逸物と格闘しながら、必死に白い喉を鳴らして、若い牡のエキスを嘔下えんげしている。

「んっ、んっ、んっ、んっ……」

（え、僕の精液を飲んで……!?!）

男としてはまるでおしっこを飲ませているかのような気分になって罪悪感を覚える。同時になんともいえない幸福感が胸の奥から湧き上がってくる。

射精が終わり、逸物が小さくなつていくと、尿道に残つた最後の一滴まで吸い取つたエリーゼは口を離して、満足げな溜息をついた。

「はあ、ごちそうさま。美味しかったわよ。ハヤテくんのザーメン♪」

「エリーゼさん……」

なんと声をかけていいのかわからないハヤテに、エリーゼは莞爾と微笑んだ。

「次は、わたしがやつてもらいたいかな？」

「えっ!!」

戸惑うハヤテを前に、エリーゼは湯の中で立ち上がった。そして、湯船の縁に腰をかけるとM字開脚をしてみせる。

股間には青々とした黒毛が濡れて張りついていた。

「オマ○コを見るの初めてよね？」

「……」

ハヤテは無言のまま、コクンコクンと頷く。

「それじゃ説明してあげる。ハヤテくんは竿師になるのよ。女の身体のこととは隅々まで知っておかないとね」

エリーゼは両手の人差し指と中指を使って、肉割れをぐいっと開いてみせた。

夏のカンカン照りの陽射しの中、女性のもっとも奥まった場所が余すところなく晒される。



「ちよ、ちよつと、そこダメ。はう」

エリーゼやシーマの膣穴を舐めたときは、ずぼりと奥まで舌が入ったのに、ダルシエナの膣穴に舌を入れようとしたら、舌先に妙な弾力を感じた。穴がないわけではないのだが、圧倒的に狭い。

（あれ、これがいわゆる処女膜ってやつかな？）

物珍しさもあつて舌先でグリグリと舐め穿ってしまった。

「ちよ、ちよつと、あひ、ひひ……」

ビク、ビクビクビクビク……。

（あ、ダルシエナのやつがいきやがった）

生まれたときから知っているような喧嘩友達少女が、自分に舐められながらいったのだ。なんともいえない不思議な思いがある。

その直後に、熱い液体が勢いよくハヤテの顔面に浴びせられた。

ブシユ——ッ！

「げほ、げほつ、つてちよつと待てこれおまえの小便か!？」

「煩いわね。あんたが変なところ舐めるから痺れちゃったのよ!!」

小便を顔面にかけられて怒るハヤテに、ダルシエナは顔を真っ赤にして言い返す。何をやらしても喧嘩になる二人に、騎乗位中のシーマが呆れる。

「まあ、顔面騎乗初体験で、いきながら失禁できるなんて見どころあるじゃないか」

「そうですか。シーマお姉様♪」

たちまち甘えるダルシエナに、シーマはさらなる提案をした。

「ちよūdい機会だから、おまえも処女を捨てておけ」

「えっ!!」

敬愛する先輩からあつさり命じられたダルシエナは目を剥き、頬に冷汗を流す。

「あ、あたしにこいつの腐れチンポで処女を捨てろ、と。正直、犬にくれてやったほうがマシな気分なんですけど……?」

「僕だってダルシエナなんかとやりたくない。犬とやっている!」

「カチーン!」

腰を上げたダルシエナはおもむろに懐からクナイを取り出すと、びしょびしょのハヤテの顔面に向かって振り下ろす。

その洒落にならない一撃を、ハヤテは慌てて両手で受け止める。

「あぶねえ」

「死ね。あんたの穴はわたしが埋めてやるわ」

そんな二人の殺伐としたやり取りを他所よそに、シーマは騎乗位を解いた。

「ほら、早くしろ。華の命は短いというだろ。女忍びが処女なんてさまにならないぞ。早く捨てるに如くしはない。下手に機会を損なうと、二十歳を過ぎた後でシヨタに走った挙句、自分が破瓜はかしたことも告げられないような惨めな初体験になるぞ」

「ちよ、ちよつとシーマお姉様。なんですかその例えは？　いくらなんでもそれは酷いですよ」

ダルシエナの魂の叫びに、一人見物していたレイヴンがぐらついた。それを察したシーマが質問する。

「お頭、どうかしましたか？」

「い、いや……なんでもない」

居住まいを正したレイヴンは、傲慢に命令した。

「確かに竿師の修行のためには、処女も知っておいたほうがいいだろう」

「はあ、一流の忍びになるのも大変だわ。まさかあんたなんかとセックスしなくちゃならない日がこようとは……」

ぶつくさ文句を言いながらもダルシエナは、シーマに代わって同じ姿勢で、ハヤテの逸物の上に跨がった。

「このまま腰を下ろせばいいんですか？」

「そうだ」

愛するお姉様の指示を仰ぎながら、ダルシエナはイヤイヤ腰を下ろした。

シーマの愛液に濡れ光る逸物が、ダルシエナの小さな肉貝の中に突き刺さる。しかし、亀頭部が半分ほど潜ったところで、止まった。

「つて、イタッ！　マジ痛い！　無理、絶対無理」

泣き言を言うダルシエナの背後に、無言のまますつとレイヴウンが立った。そして、両肩に手をかけると、そのままぐいっと体重をかける。

「ひぎっ！」

ダルシエナは踏ん張ろうとしたがダメだった。レイヴウンはタイミングを計り、ダルシエナが息を吐いた瞬間に押したのだ。

人間、息を吐いた瞬間は踏ん張りが利かない。冷酷非情な頭領の体重をかけられて、下忍の娘の腰は沈んでいく。

ブツッ！ メリメリメリメリ！

逸物は一気に根元まで突き刺さった。

「イタ——ッ！」

山々に、少女の悲鳴が木霊する。

一方ハヤテのほうも苦悶していた。

(締まるっていうか、セマッ！)

エリーゼやダルシエナのような大人の女とは違う。お子様の腔洞の痛いほどの締めつけにハヤテは悶絶した。

「ひ、酷いです。お頭……」

さすがのダルシエナも涙ながらに抗議したが、レイヴウンの口元には冷たい微笑が閃いていた。

「こういうのは勢いだ。お詫びとしてわたしが気持ちよくしてやろう」
そう言った次の瞬間、ダルシエナの黄色い忍び装束がはだけられた。

ダルシエナは上半身まで裸になってしまう。

「あっ」

仰向けになっているハヤテは、幼馴染みの裸身を仰ぎ見ることになった。

（これがダルシエナの裸。意外と綺麗じゃん。こいつこんな可愛かったつけ。ダルシエナのくせにオマ○コも気持ちいい）

すでにシーマの騎乗位で十分に追い詰められていたこともあって、一気に昂^{たかぶ}りが駆け抜ける。

「幼馴染みのちんぼは美味かろう。気持ちよくイクといい」

寶石の輝く女怪人の指先が、男女の結合部をまさぐった。そして、陰核を抓む。

「ひあ、そ、そこ、気持ちいい」

破瓜の痛みに悶える少女でも、陰核を弄られると快感が走るらしい。

同時に狭い腔洞が、キュッキュツと逸物を締めてきた。

（あ、ヤバイ。ダルシエナのやつが可愛く見える。こいつの中に射精したい）

あるいはシーマなりの気遣いで、慕ってくる少女が破瓜の痛みに悶える時間を短くするために、わざとハヤテを射精寸前に留めておいたのかもしれない。

一方、レイヴウンの指先もリズムカルに、陰核を責め立てている。



「あ、ああ、イク、イク、イク……」

「遠慮することはない。思いつきりイクといい。そら♪」

「はわああああ!!!」

女怪人の指マンによって、破瓜に苦しむ少女が絶頂を迎えた。

ビクビクビクビク……!

少女の幼い肢体が痙攣し、膣洞も吸引してきた。

「くっ」

ダルシエナの中で射精するのは、なんか悔しいと思つたハヤテだが、耐えられず射精してしまった。

ドビユ、ドビユ、ドビユ、ドビユ……。

「いや、やだ、ビクビクビクっしてしている。ひあ、ぶしゅって、ぶしゅってきた。なんか温かいの」

初めて膣内射精されたダルシエナは混乱しているようだ。

その可愛い光景を見上げながら、思う存分射精したハヤテは一息ついた。

破瓜の血を纏う逸物が抜け落ちる。直後に、その半萎えの逸物をシーマによって捕らえられた。

「ふふふ、なに満足したような顔している。竿師としての修行はここからが本番だぞ」
「ひいあ」

射精した直後の逸物が、容赦なく再勃起させられる。
ハヤテはこの晩から、竿師としての修行がいかに過酷なものであるか、身をもって思い知らされることになった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!